

版画物語

山田の昔ものがたり（その二）

だい

じゃ

大蛇

文

齊藤久代

監

修 土井敏夫

版画制作

四・五・六年児童

これは、山田村鎌倉の田中家に今も語り伝えられている

『大蛇退治』のお話です。

むかし、むかし、田中家が山田の里さとの鎌倉かまくらの地主じぬしだったころのことです。

その家の主人しゅじんの名は、田中八郎平はちろうへいとい  
たいそうなはたらき者のものまじめな男おとこでした。

朝あさもまだ暗くらいうちから、夕方ゆうがたは真まつ暗くらになるまで  
そとではたらいていました。



田植えも終わった、五月二十五日の朝のことです。

八郎平は、朝早く田の水回りをしたあと、家に帰つてきました。

ふと庭を見ると、座敷の外から中二階へかけて松の木が立てかけてありました。

八郎平は、

『これは、いつたいだれのいたずらかな。』

と、ふしぎに思いました。近よつてよく見るとなんと、松の木ではなく大蛇ではありませんか。



田中家の中二階には、まゆから生糸をとるためにたくさんのかいこがわれていました。

大蛇は、中二階の窓から首を入れ、舌を出し入れしながらあたりの様子をうかがっています。

真っ白な蚕に、大蛇の真っ赤な舌が今にもとどきそ  
うです。



おどろいた八郎平は

『そごどけ、そごどけ。し、し、し、し。』  
と、さけんで、手のひらで大蛇だいじやのせなかをたたいて  
みました。でも、大蛇だいじやは知らん顔かおをして  
今にも蚕かいこを食べようとしています。



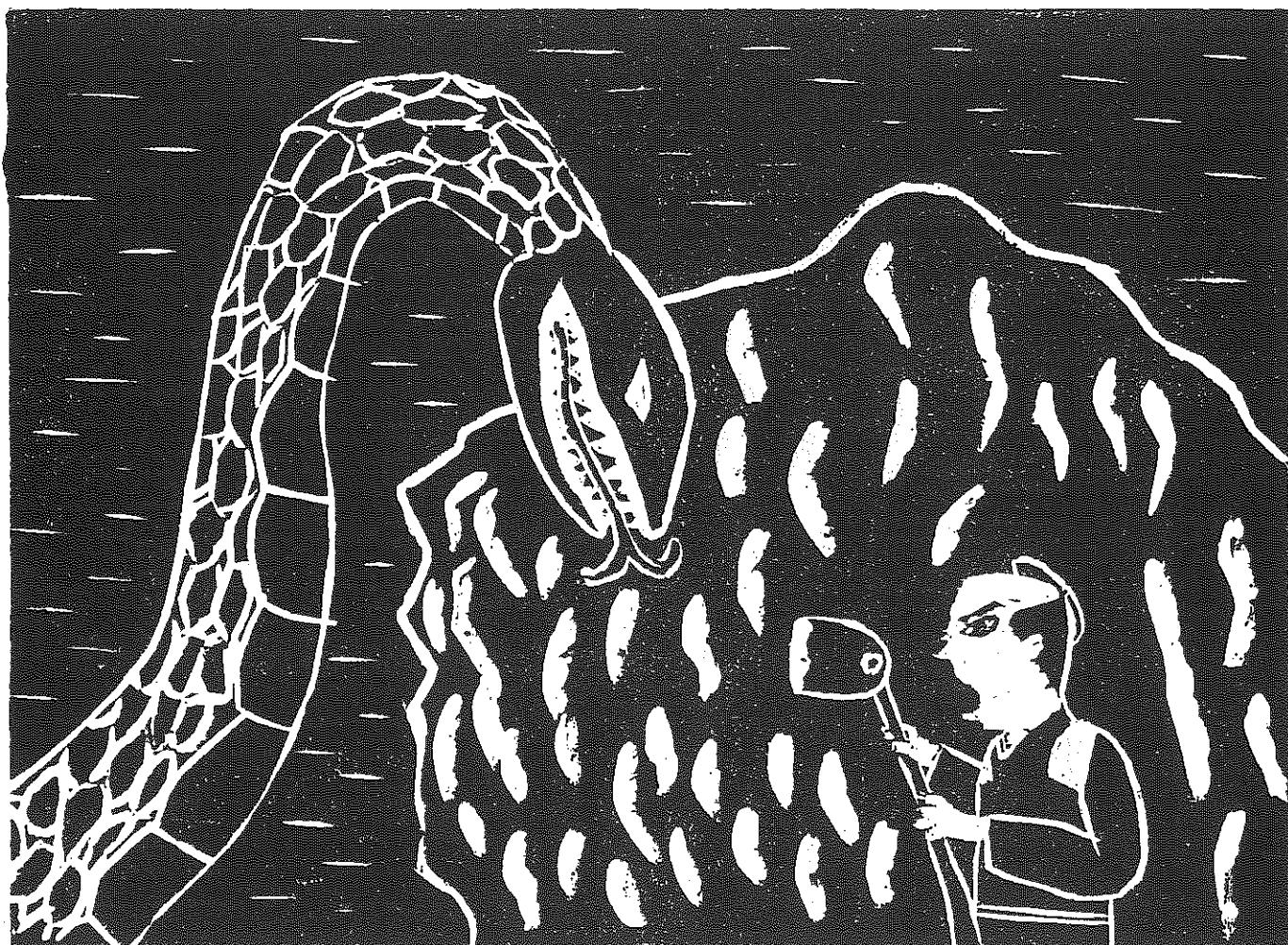
今度は、手に持つていた鍬で、せなかをたたくと  
大蛇は、するするとおりてきて

八郎平の方をふりかえりました。

そして、いきなり白い霧のようなものを  
口から『ぐわーっ』とはきました。

食べられてはたいへんと思つた八郎平は  
鍬を大蛇の口にさしこみ、大声で助けをもとめました。

『おーい、だれかいるかあ。』



一足先に家に帰つていた、作男たち八人は朝ごはんを食べようと、主人の帰りを待つていました。

そこへ、八郎平のさけび声がしたのです。

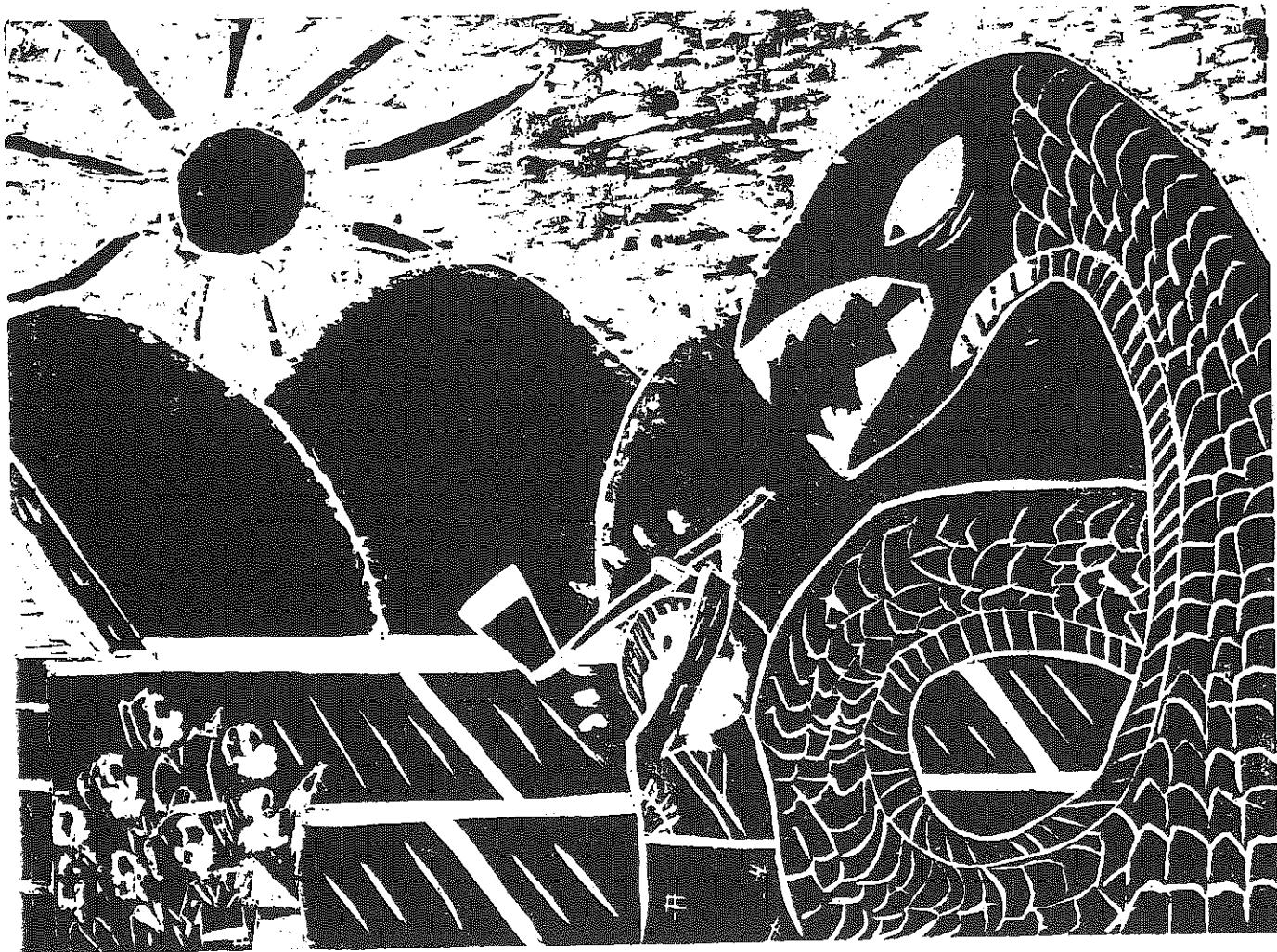
作男たちが、おどろいて外に出てみると

主人と大蛇がたたかっているところです。

作男たちは、これは一大事と

手に手に鎌、鍬、棒切れを持ち

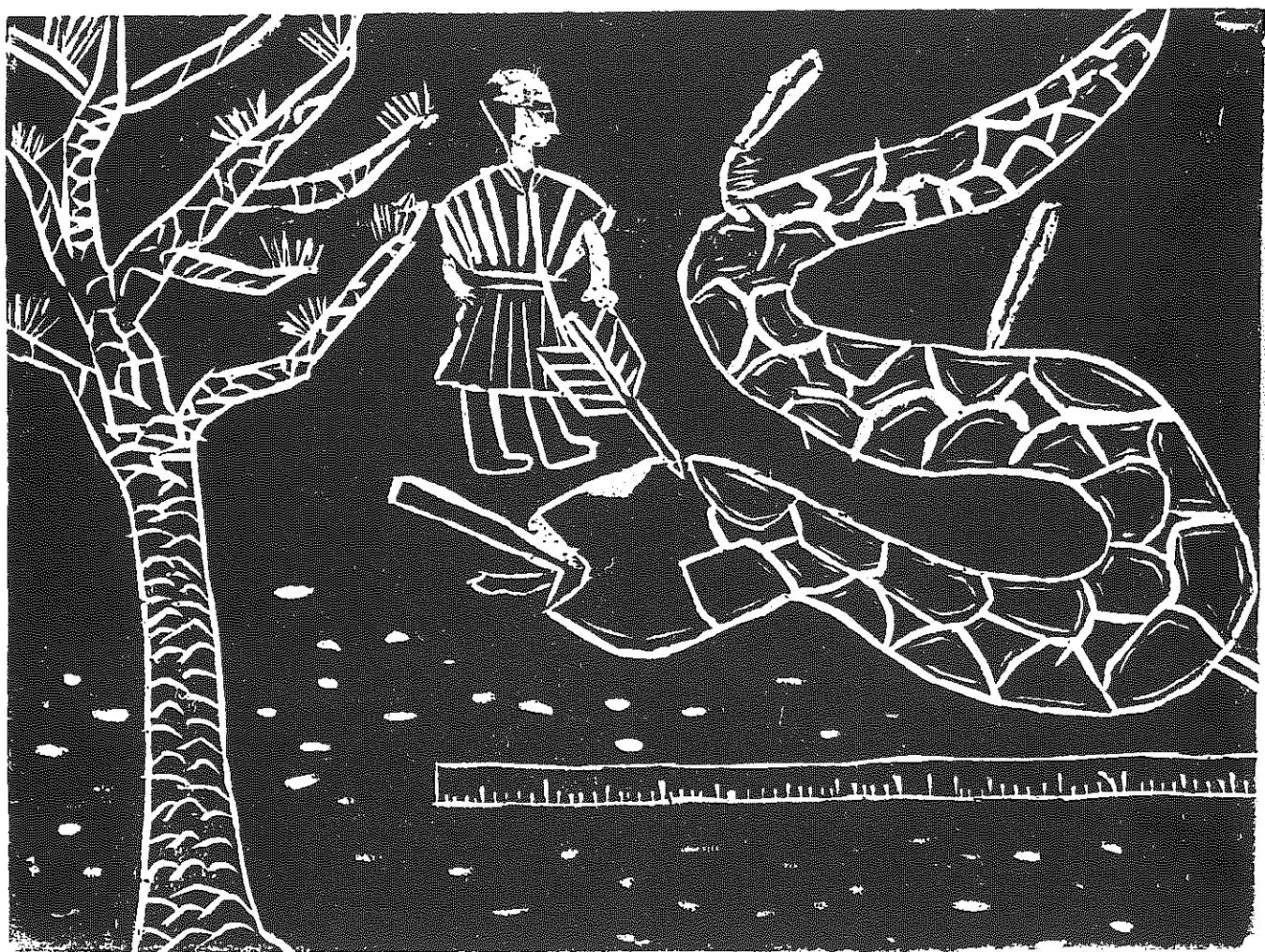
大蛇に向かっていきました。



6年 浅野 絵里香

八郎平と作男たちは、力を合わせてたたかいとうとう大蛇を退治しました。

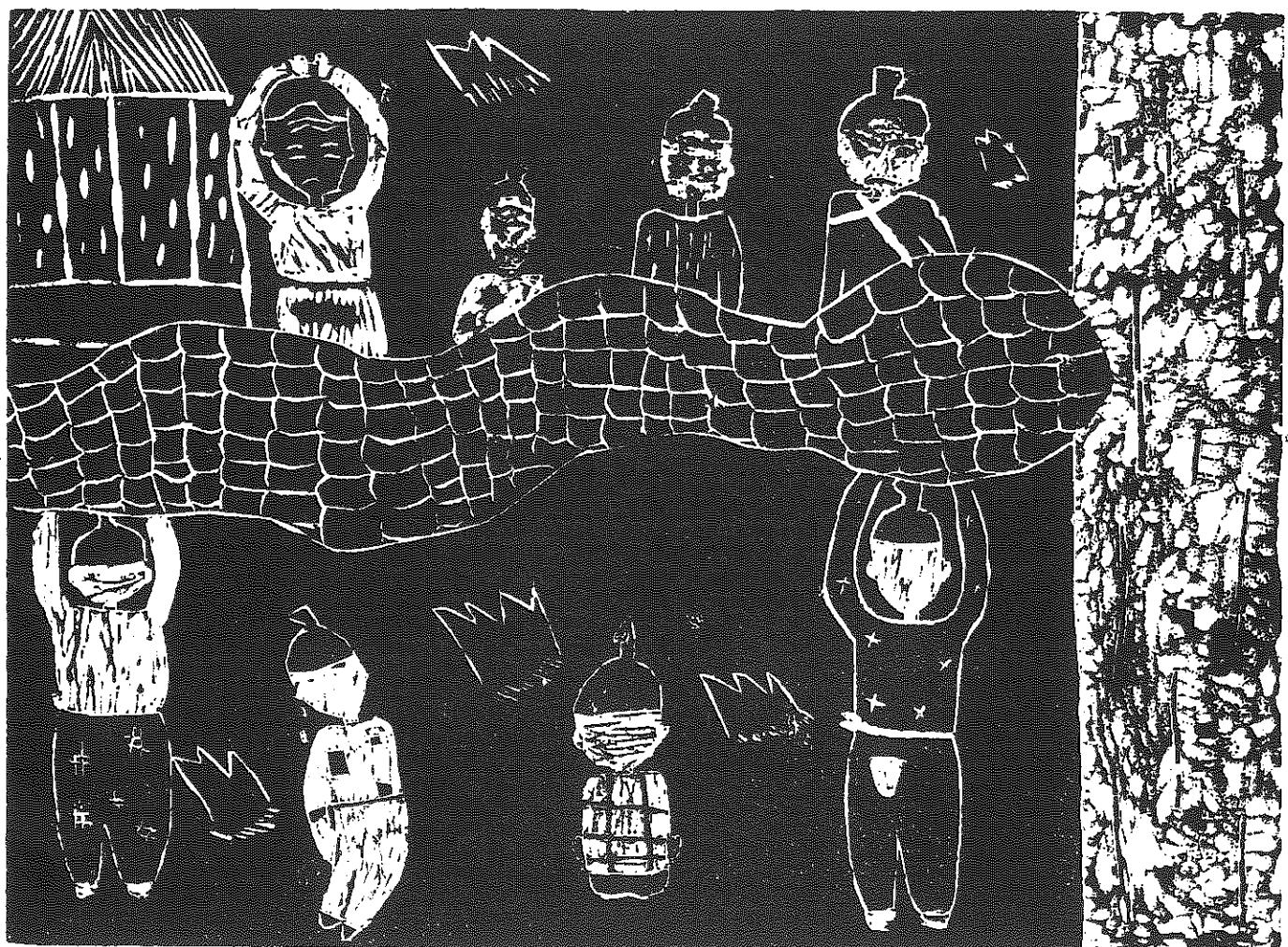
大蛇の大きさをはかつてみると、長さ六メートル、胴回りが四十センチメートルもありました。



その後、みんなは朝ごはんをすませ

退治たいじした大蛇だいじやを、家の下したを流ながれる山田川やまだがわへ運はこびました。

そして、まきを高く、高くつんでやきました。



5年 前田志生里

次の日、八郎平は、やきあとを見にいきました。

頭あたまとしつぽはやけていましたが、体からだはやけのこつて

います。

ふしきに思つて、よく見ると

人間にんげんの手てのような指ゆびが三本さんぼんありました。

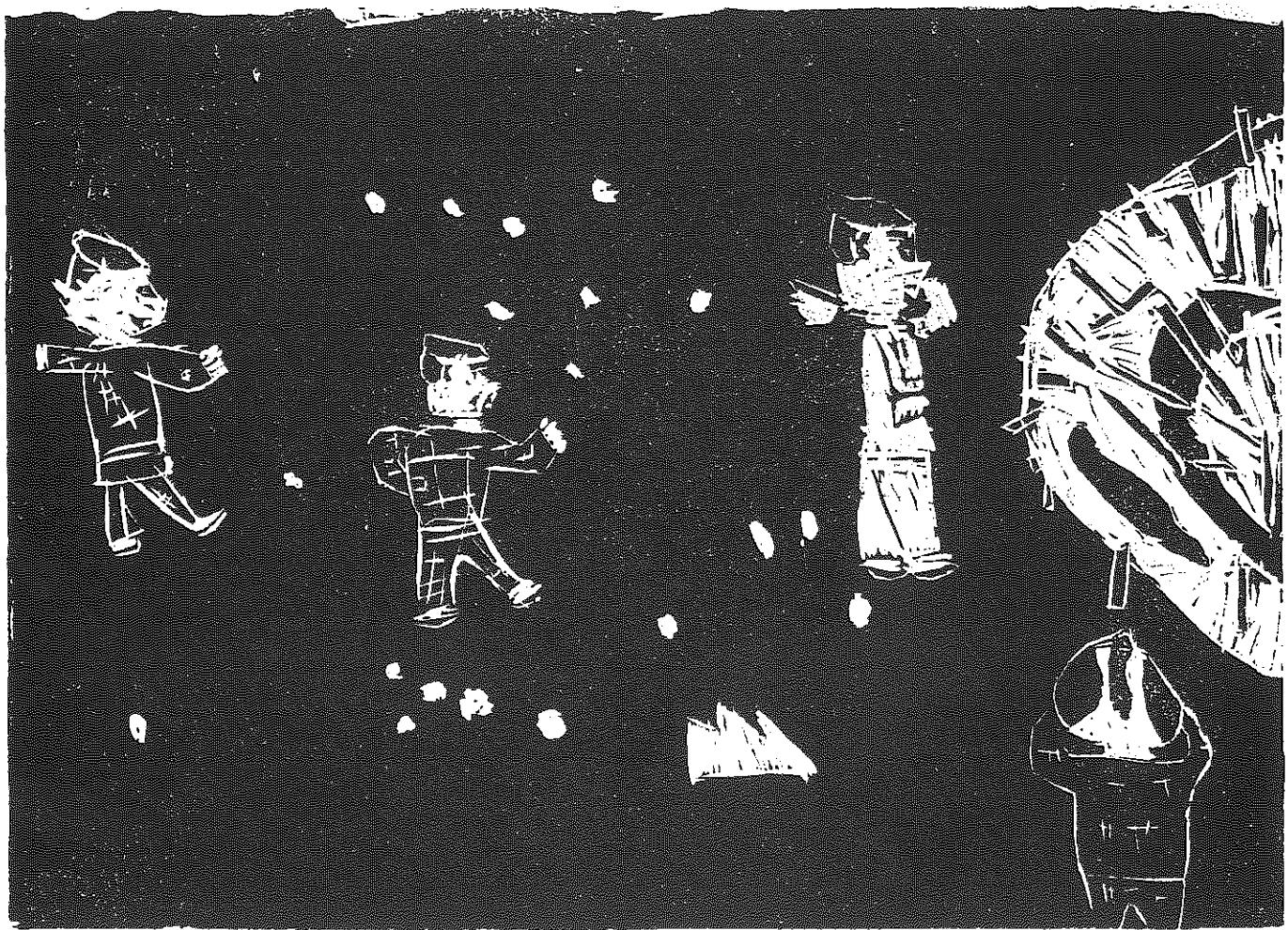
『こ、これは、きっとこの大蛇だいじやにのみこまれた者のものの

指ゆびにちがいない。』

と、こしをぬかさんばかりにおどろきました。



このことは、村の人たちにもすぐ知れわたり  
毎日、見物人がぞくぞく集まつてきました。  
ついに、富山の城下にも知れわたり、殿様の耳にも  
入ったのです。



八郎平は、お城によばれ

大蛇退治の話を殿様にくわしく語りました。

すると、殿様は、八郎平のゆう気に

たいへん感心され

そのときの様子を絵にかかせ

それをほうびとして八郎平にあたえました。

八郎平は、たいへんよろこんで

その絵を家に持ち帰りました。



『大蛇退治の絵』には

天保六年（一八三五年）五月二十五日と書かれています。

今も田中家では、この絵を作物の神様として  
また、田中家の宝ものとして

大切に、大切にほぞんしています。



6年 小塚 久雄

山田の昔ものがたり（その二）

「大 蛇」

平成六年七月一日 発行

監修 土井 敏夫  
文章指導 齊藤 久代  
高堂 昭則  
安土梨恵子

版画指導 高地 修  
山口 雅美  
瀬川 宣子

編集協力 岡崎 洋子  
今井 博  
坂下 豊一

高地 修  
澤井 武志  
沼崎 信行

堀川 茂  
山田 俊雄  
山下 謙治

小川 義勝  
古川 一美  
山岸 幸子

岡村 元治  
中井 典代  
若林 美雪

富山県婦負郡山田村中瀬一〇六  
電話（〇七六四）五七一三五四

発行所

山田村立山田小学校